

## 1. はじめに

### 1) 人間の成長

子供は母親の体内を第一の住居として成育し、約10カ月を経て生まれてくる。人間の子供は早く生まれすぎた胎児とも云われる。それは他の動物と比べると自力で、起きたり、歩いたりできず、母親をはじめとして、他の人々の助けを必要とするからである。子供から大人に成長するまでの間、家族に守られて、その生活を営むことになる。いわば成人して自立するまでの間は、主として彼らが帰属する家族の一員として社会生活も行うのである。

個人の生活に、多大な影響を与えるのは、両親をはじめ祖父母、兄弟、姉妹などの家族であり、人格形成上に果たす役割は計り知れない。

ところが、近年子供にとっての生活拠点である家族の日常生活に、様々な変化が起こっているといわれる。それは、従来までの家族の役割の変化と関連しつつ出てきたことであり、一方、社会の様々な状況にも対応して興ったことでもある。

まず個人にとっては、誕生と同時に、この世に生存する権利、発達権、教育権を有している。子供が持っている権利を保障するための諸条件が整えられ、さらに、生涯を通して発達を保障されることが必要である。そしてそれは、誰しもが希望している自己の確認につながることである。

人間が家族をつくり、生活を営むということは、同じ様な価値観によって、または深い愛情によって結ばれた男女が、相互に助け合って協同生活することであろう。その過程で、子供を生み育て、次代を創造する世代を養育するわけである。家族が幸に生活できるように保証するのが、父母である大人の務めになるが、その折りに、父親も母親も親であると同時に社会的な仕事を持つ一個人として生活する。

子供は、その両親の生きる姿を糧として、次の時代へとステップ・アップするための準備期を送るのである。

### 2) 都市で生活する中で

前述したように、両親と子供で作る家族生活は、社会からみたらいわば閉ざされた生活とも云える。それは、外部の諸条件から成長前の子供を守りながら養育しようと懸命になればなるほど、硬い殻を造り上げているからであろう。そして現在社会で発生している異常な諸問題を受けて、親たちは、ますます殻を閉ざしてしまっている。

殻が硬いあまりお互いの生活がみえず、日常生活の実体がとらえられない

ので、助けを必要とする状況があったとしても、把握できない等の問題点も指摘されている。それは、現在の生活が家族だけでは対応できないところにきているのに、開放せずに自己を抑圧して、閉じ込めようとするためであろう。

まず、家族構成の変化である。云うまでもないが、核家族で両親と子供だけの小家族が7割をしめようとしている。特に都市で生活している家族は、各々地方から集まっていて、父親の転勤などもあり、地域の中に定着していない場合が多い。その上、現在では両親とも働かねば、理想とする生活が出来ないので、常勤だけでなく、パートタイム労働に従事する女性が増加している。その結果、家族だけで、全ての生活を完結することが出来なくなっている。

一方、女性の社会進出が著しく、結婚、出産、育児を経て仕事を続け、その能力を社会に有効に生かしたい意志を持っている。それは、女性の自己実現のためだけではなく、自立した生活への切なる要求でもある。

母親が仕事を持っている場合には、夫と子供の協力は云うまでもないが、各方面からの協力が必要となる。例えば、子育て、病気の看護、精神的な保護などがあげられる。日常生活の営みは、多くの家族の場合は母親の役割として固定していたが、前述したように家族が共に生きる社会にあつては従来の慣習のみで役割は決められるものではなく家族で決めるものであろう。家族全員がそれぞれ自立した生活を生き生きと送ることを探るとき、同じ社会で生活をする地域社会の家族たちにとっては、個人的な解決よりも、より良い方法が考えられるのではないだろうか。

#### ① 生活の仕組みから変える

- ・生活時間を変える（労働時間、通勤時間、子供の生活時間）……労働時間の短縮、子供の週休2日制などが生活をレベルアップ、果してできるか。現在の課題として家族が一緒に過ごせる時間を増加させるように努力をしているが、若干の不安がなくもない、余暇時間を生み出し、交流を計ろうとする。
- ・労働形態の変化……フレックス・タイム制、自宅で仕事をする。
- ・生活の機械化……家事労働時間の短縮が殆ど完了して、調理することや針を持つことが、従来の料理や裁縫と異なつてきて、レジャー化しつつある。
- ・生活空間の変化……機能別生活に対応した空間作りが、生活様式に変化を与える。

#### ② 集まって生活する利点は

- ・小家族による孤独からの開放……一種の煩わしさが伴うが、住居の殻をやわらかとすることで、地域の人々の動きを知り、交流が生まれる。まず、子供同志、子供の親同志という関係、すなわち子→子の親→家族というつ

ながりがもう一歩進んで地域に広がる。

- ・子育ての協同化……働く母親が子どもの育児などを個人から協同に移行させる。学童保育など子供の世界が開かれる。
- ・大人にとって相互補助……家事労働をはじめとして、趣味、創造の世界を楽しむ。
- ・生活の省エネルギー化……エネルギーの使い方の工夫、暖房、洗濯、炊事、給湯など、協同生活によるバランスを考慮した生活ができる。

### 3) コレクティブを成り立たせる仕組み

今回の調査を通して如何に問題を展開することができるか、協同生活を成立するためのプロセスを見ると、次のように考えることが出来よう。

- ① 経済的な自立、個人の生活を尊重
- ② 段階的共同への移行
- ③ 助け合いができる心
- ④ 共同生活の楽しさ
- ⑤ 自己犠牲を強くない
- ⑥ 個人と集団のほどよい関係
- ⑦ 個人から自治体の援助へ→社会への広がり

個人と協同生活の両立のためには、住環境の計画が十分に行われねばならないが、生活空間が上記の条件をカバーできる計画方法が見い出せるであろう。そこにいたる前に日本の都市生活者にとって、協同居住型集合生活が受け入れられるかが問われるところである。